

事例 39 アラブ人の温かさと冷たさ

女心と秋の空という言葉が大昔の日本にはあった。

どうやら最近では女心が男心にとって変わってしまった感さえある。

そんなことを考え自分の今ある状況にぼんやり思いをめぐらせるのは、駐在 2 年の経験を持つ添田だった。

ガッツマンの添田が元気をなくし、ぼんやり考え込むようになったのは、彼の長年の取引相手との関係が最近ギクシャクしてきたためだった。

彼のいままでの取引相手が「最近添田のことをあまりよく思っていない」という噂が伝わってきた。

そこで彼は心配になり、アッカードのところに出向いてみたのだが、どうやら以前とは違った対応をしていることが何となく感じられた。

表面的にはいつもと変わらない対応なのだが、彼にはやはり何か違う印象があった。

それだけある意味で、このアッカードとは付き合い合っていた。

あまり話さなくてもアッカードは添田の意向を理解し、今まで何かと彼を助けてきてくれたのだ。

そうした甘えもあって添田は最近自分の担当が変わったこともあり、多忙にかまけてアッカードのところには顔を出していなかったのだ。

今手がけている仕事が終わったら、一度あいつとゆっくり飯でも食いながらこの山を自分ひとりでやり通せたことを自慢してやろう。

あいつもきっと喜んでくれるはずだ。そんなことを考えてもう 3 カ月が過ぎていたのだが男同士ということもあって、添田はあまりアッカードのところへ顔を出さないでいることを気にしていなかったのだ。

しかし、実際に彼を訪ねてみて、状況が容易ではないことに気がついた。

その日はアッカードが忙しそうにしていることもあり、早々に失礼することにした。

2 日ほどして添田は、再度アッカードの所に仕事の合間に立ち寄ってみることにした。

しかし、残念なことに彼は留守で、一週間たないと事務所には出てこないと彼の秘書が答えた。

そして一週間が過ぎて、再度アッカードに電話をかけると、彼は不愉快そうに忙しくて会っている暇がないと断ってきた。

【対応策】

アラブのことわざに「よく訪ねてくるものは見方であり、訪ねなくなったものは敵だ」というのがある。

つまり、友人は常に相手を思いよく訪ねてくれるが、敵や何か悪いことをたくらんでいる相手はあまり顔を見せなくなるということだ。

だから、友人宅に行ったとき、最初に切り出すのは共通の知人の様子だ、その人たちの名前が出たとき、相手が示す表情によって、今、友人と知人がどういう関係にあるのかが判断できるからだ。

当然のことながら、友人が知人の誰かの名前を出したときに不愉快な表情を浮かべたらその日はその知人のことは話題にしないのが、賢明であろうということになる。

添田の場合、全く日本的な対応をアラブ人にしてしまったことが、失敗の原因になった。

添田が新しい仕事に熱心になるあまり、それまでいい関係にあったアッカドを訪ねなくなっていたことは大きな間違いだった。添田が新しい仕事の関係で、ウサーマの事務所に入り浸りになっていることは、アッカドには筒抜けになっていたということだ。

アッカドはそうした添田の仕事のやり方をみて「添田は利益を最優先させる男だ」と考えたのだ。

だからあれだけ自分と親しくしていたにもかかわらず、最近はウサーマのところだけに顔を出すようになったのだ。そこではたまには俺のことも話題に上るだろう、そうしたらひょっこり顔を出すのが自然というものだ。

しかし、それでも顔を出さないということは、何か自分のことを悪く思っているからに外ならない。そう考えるのがアラブ人の一般的な順序なのだ。

添田はそうした相手の誤解を解くために折角でかけたにもかかわらず、簡単なミスを犯している。

彼はアッカドが不在の場合、彼の名刺に簡単なメッセージを書いて彼の秘書に渡してこべきだったのだ。

そうすれば相手は訪ねてくれたにもかかわらず、留守であったことを恐縮し、今までの添田の不音信を許してくれただろう。

アッカドの秘書が添田の事を心がけてくれて、アッカドとの関係修復に気を配ってくれるなどとは期待すべきではない。

いったん冷えた関係の修復には、運がよくても倍以上の時間を必要とすると考えておくべきであろう。その時は、友人に仲介してもらうのが一番早いかもしれない。